

第 11 回教育哲学会奨励賞 選考結果および授賞理由

選考結果

第 11 回の教育哲学会奨励賞は、『教育哲学研究』第 128 号、第 129 号に掲載された論文を対象として、理事会において選考を行い、奨励賞にふさわしい論文として、松枝拓生会員の「ドゥルーズの思想における「愚かさ」の含意 — 「学習」における反省の働きに着目して —」（『教育哲学研究』第 129 号所収）を受賞作として選定した。

授賞理由

松枝論文は、G. ドゥルーズにおける「思考」と「愚かさ」の関係をめぐる議論の検討を通して、ドゥルーズの学習論に関する先行研究がこれまで論じてこなかった「学習」に伴う反省の働きならびに学習主体に生じる世界了解の変化の内実を明らかにし、そこから啓蒙をめぐる近年の教育哲学における議論への示唆を得ようと試みるものである。本論文は、表象による「思考」や「学習」の限界について示唆的であり、また、啓蒙批判に立つ教育（哲）学への警告という点でも意義深い。同時に、「愚かさ」というテーマが、自己の経験世界の秩序を破壊するような衝撃として機能するという側面について、教育（哲）学と啓蒙のかかわりという大きなテーマに関連づけて考察を展開しようと試みている点においても興味深い。

ドゥルーズのテキストを、関連する先行研究を丁寧に参照しながら、丹念に読み解いており、研究目的の明快さ、方法論の適切さ、論述展開の論理的整合においても、高く評価できる。以上のことから、本論文は奨励賞に十分に値する論考であるといえる。

しかしながら他方で、ドゥルーズ独自の概念使用の解説に重きが置かれそこにとどまっているのではないかという意見もあった。また、確かに結論部で教育哲学研究の文脈への接続が試みられているものの、従来の議論をドゥルーズの特異な用語法で言い換えているように読み取れる論述も見受けられる。

「愚かさ」の概念と「啓蒙」の教育（哲）学的な問題系の結びつけ方について、いまいちど精査する必要があるのではないか。

そもそも「愚かさ」とは、ドゥルーズ論の文脈をこえて、また近代教育（哲）学の文脈もこえて、ソクラテスの「無知の知」、キリスト教の「神の弱さ」（パウロ）、宮沢賢治の「デクノボー」など、伝統的に、かつ広く考察されてきたテーマである。このようなより大きな思想の潮流に目を向けたとき、本論文がどう構想され、どう展開されていくのか、今後に大いに期待したいところである。

以上をもって、理事会では、松枝拓生会員の「ドゥルーズの思想における「愚かさ」の含意 — 「学習」における反省の働きに着目して —」を第 11 回教育哲学会奨励賞にふさわしい論文として選定した。